

小田又の記 vol.03 2016.10発行

島根県益田市美都町にある小田又という名の集落。この地を軸に暮らす 人たちのドキュメント。

小田又集落で一番の草刈り名人。日がな一日、自分のベースで草を刈りを続ける。生まれも育ちも小田又。集落旧宅の裏山が崩れそうになってきてからは麓の町に住まいを移した。自動車免許を戻してからは、ラクーターで数十分かけ、それでも毎日通い続けている。2年前に体調を崩して一時期は田んぼに行くのを止められていた。今では体力も回復し、根っからの作業好きの寺井栄さん(89歳)の百姓作業を、家族は心配しながらも見守り続けている。90度に近い斜面も梯子と刈り払い機できれいに草を刈り、小田又集落の景観を保ち続けている。田んぼでの世間話ではない話を聞いてみようと頼んでみた。



製作·取材·編集 佐原晃子 佐原宏臣

〒 698-0203 島根県益田市美都町都茂 1906-3 TEL 080-3017-4717 FAX 0856-52-2829 メール kaeruchan555@gmail.com [2016.07.26,28,08.03録音]

— 寺井さんのお父さんのお仕事は何 だったんですか?

寺井: 宮大工。

--- お父さんもここの生まれですか? 寺井: いんや、ここじゃない。養子に来 たの。宮大工というのは普通の人間の住 まいをする家を作ったらだめなんじゃ。 そういう昔は不文律のところがあったん じゃ。それからお宮をやる人はもう寺 と宮ばっかりを一年中やってまわるん じゃ、日本全国。その場合ねぇ、お宮な らお宮、お寺ならお寺をやる場合に山で ね、ひと山買うんじゃ。東の木は東、北 の木は北に西の木は西に使わないと、地 球ってのは自転があるから、それで木も その性質を持っているからそれを変える ことはできんの。北側の木を北側に使う の。自然に逆らわないっちゅうこと。自 然に逆らえばだめになる。

— 宮大工はずっと続けてたんですか?

寺井: いや、万博の時に茶室やって… —— 大阪万博? 专井:うん。それからもう。そんなにいつでも宮大工の仕事はないから。普通の建築大工になったほうがええわと。やっぱりあのう、人は家の中で生活するんじゃけえなあ。いつどうしてもねえ、普通の大工さんの方がなんとかなる率が多いから、宮大工は辞めて。親父の一生を知っとるからねえ、どういう経緯をたどって成人して一家を支えたかっていうことをねえ。だから今でも親父のことはよく覚えとる。なにかって時には記憶に出てくるわけじゃあ。

---- 寺井さんは小学校を出て、高等科 へは…

寺井: そりゃあもう転々としとったな。 —— 進学はしなかったんですね。

寺井: なにやっても独学。親父が大工になれって言うんで親父についていったがな。とにかく職人という者は、大工というものはとにかく暇があれば刃物を研ぐの。カンナ、ノミ、とにかく木を傷つける道具を常に磨いて切るものがよう切れんかったら仕事できんのじゃね。例えばカンナで木を削る。削りはじめも削り終



りも厚みも同じ、幅も同じ。昔は弟子 入りして3年間の実地をやって1年の お礼奉公を済まして師匠離れというもの をやるわけじゃ。そのときには師匠の所 から一人前として育って世間から認めら れて、世間というものは一般の人はもち ろんだが大工同士で認めるということ じゃ。これは一人前の大工じゃと。

— 寺井さんはその奉公をしたんですか?

寺井: やらん。電気屋になってしもうた。 — お父さんについていたのはどれく らいだったんですか?

寺井:1年もついてなかったな。親父が 「これなんで彫ったんだ? | と。あんま りきれいに彫ってないから聞くわけ。わ しも大工になる気じゃった。ところが ねぇ。「お前この穴は木の穴はなんで彫っ たか | ていうて親父にやられたんじゃあ。 そがに指で彫るわけにいかんのじゃ、豆 腐じゃないんじゃけぇ。こんなことなら、 やめたやめたと思うて、それから電気屋 になった。きれいに彫ってないと穴が正 確でも柔らかくて、結局柔らかいという ことは次の仕事の柱をはめ込んでもグラ グラする。ズボッとはまるけれども良い 仕事にならない。入ったらきちんと動か ないようにしないといけない。だから、 穴彫りは難しいんじゃ。材料によるしね。 基本でもある。

―― お父さんの所を辞めてから電気屋 さんに奉公に出たんですか?

寺井: それは会社に入って、電気屋の仕事をしながらいろんな技術を身につけた。それから益田での仕事だけでなく、あっちこっちに北海道の辺から東北へな。

―― 小田又の電信柱を立てたり電線を引いたりもしたんですか?

寺井: ここはもう立ってた。じゃけぇ電気のないところないところ、穴掘って電柱立てて、電線を引っ張って、トランスをあげて、電圧を下げてそれで各家庭に屋内配線。屋内配線が電気屋の免状じゃけぇなあ。

— 電気屋さんの免許はいつ取ったんですか?

寺井: 益田の会社にいるときにとった。 だいたいねえ、昔は逓信省(※1)いうと ころが試験やりよったんじゃね。今はそ うじゃないけどね。制度が変わってね。 今の電電公社。資格を一括でやっとっ てね。2日かかるんじゃ試験が。わしは 1日で戻ってきよった。この辺は広島で やるんじゃ。行った日と明くての日を1 日やって戻ってそれで、まあ、もらうん じゃがね。筆記と実地と。両方やる。じゃ が、わしは、まあ半日っちゅうか、行っ た目に全部どっちも受けてオッケーがで たけぇ。昔はねえ、国家試験っちゅうた ら60点で合格。明けての日に他のもん は帰ってきたが、わしはその日の夕方に は帰ってきた。試験は随分受けた。最後 は電気屋の主任、一種二種三種とある が、大学出たら二種を強制的に電気科出 たらもらえる国の制度になっとるんだが ねえ。その頃、三種試験の1次と2次が あるんじゃが1次試験は通ったが次は受 ける意欲がなくなって受けてない。

―― もったいない。

寺井: やっぱり考えるとこあって、こがんことやっとったら責任ばっかり重たくなって金はたいしたことはないんじゃけえ、儲かるのは会社が儲かるばっかり

— こばえ?走るのが速い人がってことですか?

寺井: いやいや、こばやいっていうてね え、手先の早い人が向いてる。

―― 手先の器用な人のことですね。

寺井: 東北とか北海道の方によく行った なあ。東北は送電線多いけえなあ。

— そうなんですか。(遠くに見える) あの送電線と同じのを建てるんですか? **寺井**: あれを建てるの。あれを建てて電線を引いて、動力を使って締めるの。それで締めてどれだけでいぬる(やめる)か、どれだけで止まるかそれで勝負よ。仮にこっちに2本引っ張って、片一方こうなったら、はあ、だめじゃけぇなー。 — 弛んじゃうんですね。

寺井: うん。風圧荷重といって風で圧力 がかかるの。それを計算するけぇなー。 乙風圧荷重とか、色々あるんじゃあ。



― 送電線の仕事はたいへんだったんですね。

寺井:たいへんよ、鉄柱がこうあるろう。全部をロープである程度引っ張り上げて、そいから自分でここへ抱いて反らしてあげる人とがタイミングが上手く合わんとこれが繋がれんの。だいたい繋いだらねえ、4本建てるんだけれども、一本ぐらいグラグラになるんじゃあ。それを検とうをちゃんと入れて、固めていけば(ぐらつきは)なくなっていくけれども、やっぱりカーブしたところでは電線の張力に対して抵抗を持たせてまっすぐ建てる意味で、支線っちゅうやつが入るんじゃ

なあ。そいじゃけぇ、普诵の木柱のねぇ、 こう3本くらい繋いで、用んぽの中、鉄 柱なんか建てられないけぇね、木柱の繋 いだやつを建てるの。そいで、仕事が終 わって田んぼがやわい為にジワーっと持 ち上がって、それと同時に投げられて、 飛ばされちゃうの。そりゃあ、あんた、 送電線の上からっちゅうたら11トンの トラックはこれくらい(15cmくらい)に しか見えんよ。下をぞろぞろゾロゾロ通 るんじゃけぇなあ。上から見とるん。そ いで、こっちの柱から向こうの鉄柱に行 く為には電線がある。それに竹梯子をた なげて(持ち上げて)、だいたい相棒と 2人でやるんじゃが、身体も似たような 体型の人で、重量も同じような人で、そ れをこう電線の上に竹梯子をたなげて両 方に座っておって竹を漕ぐ。そいで、隣 の鉄柱にずーっと上がっていく。竹梯子 に座っておってそれをずらして。そい じゃけぇタイミングがあれじゃいなぁ、 おうとらんと傾いてバランスがとれんよ うになる。

―― 一回降りて次の所に行くってこと はしないんですか?

寺井: そりゃあもうあんた、ここの山から谷から向こうの山まで飛んどるろう、電柱から電柱の間は。それを降りて道具を持っていくっつったら大変じゃ。

― その電線は谷から谷へはどうやって渡すんですか?

寺井:最初は綱で引っ張って渡して、傷

つけたら電気ってものは流れんけぇね、 流れが悪くなるから、石のないような条 件の良いところ良いところを行って。や る前にはだいたい、こっからあの柱へっ ちゅうたら、センター切りっちゅうて、 木へ引っかかったりしたら上がらんけぇ ね、それは切っといて。それで線をぬえ て (据えて)。そいで今度、送電線の線っ ちゅうのはニューム線で中に鉱線が入っ とる。強度を保つために。それを渡して、 銅線じゃけぇね、それを今度動力を使っ て、発動機を山の上に分解して持って上 がって、こう回すやつやね。それで張る んじゃ。ビィーンってな。引っ張って、 良いところで止めるん。止めておいて、 止めるけれども、それがあのお、最終的 にはどれだけ下がって終わりが何メー ター下がるかっていう、それが経験でね。 片一方は30cm下がった、片一方は30cm 高かったっていうんじゃあもう。乙種風 圧荷重、甲種風圧荷重ゆうてね、あれは

上あがったら風ひどいんじゃけぇ。そい じゃけぇその計算せにゃあ、やれんけぇ なあ。…だが、なが(長)しゅうやる仕 事ではないな。

----やっぱり体力勝負ですか?

寺井: ん一まぁ。それもあるがねえ。相手が目に見えんものじゃけえなあ。例えばねえ、ここで仕事をするためにはある程度向こうで電気を止めて、仕事をやるわけじゃなぁ。そうするとねえ、夏場はあの、…自然の雷、これが発生してその線路に入ってくるわけじゃけぇ。それにやられるんじゃあ。

--- 感電するんですか?

寺井: 感電するの。自然発生じゃけえ、 雷っちゅうもんは。

— それがいつ発生するかわからない。 **寺井**: わからん。夏は発生しやすいん じゃ。そいじゃけえそういう場合には もう補償もクソもあったもんじゃない。 あっちゅうあいだじゃ。

一 何人も死んでます?

寺井:死んどるな。

―― 見たこともある?

寺井: ある。感電するのも見たし、自分自身も感電した。誤ってスイッチ入れられて、高圧の電気を入れられてなぁ。あのう、随分入り組んだところで仕事をやるときにはなあ、間違えて入れる場合があるんじゃ、スイッチを。それでやられるんじゃ。

一 大丈夫だったから生きてるんですけど、どうなっちゃうんですか?

寺井:(笑)穴が開く。こっから入って 抜けるときにはねえ、こっから先くらい の穴がカーッと開く。

― え!親指の頭くらいの大きさの穴が開く?

寺井: そっから電気が抜けて逃げるん。

―― 入るときはべつに穴は開かないけ ど、出るときは穴を開けるんですか? そ こは電気の道ができるんですか?

寺井: 熱病みたいな状態になってなあ、 仕事をしよると「びゅる」っとこうなる んじゃ。

― びりっと感電した感じになるんですね。

寺井: うんうん。こりゃあ、なごう(長く) やる仕事じゃないなあと思ったけぇ。

一 今も穴が残ってたりするんですか?

寺井: 穴はもうないがなあ、こっから抜けたんじゃちゅうところは残っとる。

--- 跡が残ってるんですね。

寺井:残っとる。

―― 地方周りの仕事をしていて、こっちに戻ってきたのはいつぐらいですか?

寺井: 兵隊行く前。二十歳。

―― じゃあ、18からで2年くらい地方 回って。結婚はいつしたんですか?

寺井:戻ってから。それは別れた。

―― 小田又に住んでたんですか?

寺井: うん。子供が三人。じゃが、それは大人同士の意思の疎通で、結局あの、 …私が旅の生活が多いかった(多かった) からね。家庭生活があまり恵まれていない。

--- いくつで結婚したんですか?

寺井: 1947 年かな。

― 寺井さん誕生日はいつなんですか?

寺井:大正15年10月18日。98。

— 98 ? うそだぁ~。

寺井:89。

--- 2年前の手術の頃より元気ですね (笑) …

寺井: … (笑) 病気というものは、あまりしたという記憶はないなあ。まあ、どっちかっちゅうと元気に過ごしてきた方じゃろうなあ。まあ、風邪ひいたあ、腹が痛かったことはありよったがなあ。それ以外は記憶にはないなぁ。

. . .

寺井:いっぺん。海軍の配電番。船ん中は電気ばっかりじゃけぇなあ。それの保

(※1) 逓信省

1885 年に創設、戦前は交通・通信・電気事業を管轄 していた行政機関。1943 年、行政軍事一元化に伴 い廃止。終戦後 1946 年に復活し郵便・通信事業を 管轄。1949 年に郵政省と電気通信省に分離。

(※2) 変台

電柱上部に取り付けられた変圧器を載せるための台の アと。

【表紙の虫】ヤマトシジミ♀ (大和蜆蝶)

幼虫はカタバミを食べるため田んぼ周辺に数多く生息。 東北より南にごく普通に見られる。オスはうす紫でメス は黒。「…草から草へひらひら飛ぶ。その飛び方はな めらかではなく、いつしゅんとまるような飛び方だった。」 『ヤマトシジミの食卓』(吉田道子作)より

小田又集落水稲圃場より2016.10.06 採取

10



守点検工事、そういうことを専門にやっとったの。やりながら射撃が上手だから 射撃大会に引っ張っていかれて、競技会 随分行った。機関銃打つとか、例えば弾 の速さを測るとか、距離がなんぼじゃか ら弾の長さがなんぼですゆうたら、照準 する場合の基礎になるわけじゃな。そう いう資料作ったりしとった。

―― 兵隊から帰ってきてからは益田に 住んでたわけではないんですか?

寺井: まぁほとんど旅に出とったなあ。 — じゃあ、兵隊から帰ってずっと電 気屋さんを続けてたんですね。

寺井: 兵隊でも電気屋、丘へ上がっても電気屋。戦争から帰ってきてからはねえ、自分で仕事を取ったり、雇われてやったり。それから、よそから電気屋の組を頼まれて世話焼いて。だいたい4、5人で一組になるんじゃ。だいたい美都町だけのああいう電柱の建替えなんかはね、線路変更とかそういうやつを請け負ってね。コンクリート柱を運搬したり撤去したりして、トランスが上がってたら変台(*2)組んで載せ替えたり、そういう仕事じゃ。主として配電じゃな。まあ、冬は辛い仕事じゃなあ。とにかく寒いんじゃあ。風が酷いけぇなあ。送電

線なんか冬に上がったら半分バリバリに 凍るけえなあ。風が吹いてきて雪がふき つけるけえなあ。もうたまったもんじゃ あない。その頃からほちほち辞めること を考えたな。親も歳ひろってくるし。

それはいくつくらいですか?

寺井: それは戦後、26、7 くらいの頃。 そりゃあ旅まわっとって、身体いためと るけぇなあ。

その後はどうしたんですか?

寺井: えー、ここ(美都町)の鉱山があってそこの工事を請けおうて入って、それが終わったのはええけど資格持っとる人間がおらんから勤めてくれんかっちゅう話があって。まあ、それはいずれここの人間だから両親が歳ひろって仕事ができなくなったら帰ってこにゃぁやれんのじゃけぇ。その時になっていい歳になって家を構えとってからひきあげて帰るというのも大変じゃろう。「それじゃあ任せますわ」いうことで。

―― その鉱山会社の機械の操作とか修理とか請け負う電気部署に就いたということですか?

寺井: うーん、まあそういう感じじゃろうなあ。30年くらいおったかなあ。そいじゃがそりゃあのお、籍はおっても

ねぇ、結局会社も人間の籍をちゃんとし とかんとあてにならんじゃろう。わしは どこの仕事をやってどこの人間じゃ言わ れたんじゃあやれんから。名前だけは ちゃんと出しとくの。役所との関係があ るけぇな。

――毎日出勤してたんですか?

寺井: いや、何かあったらいく。故障が出たら行く。それ以外の時間は、まあ、家事じゃあねえ。家事やったりいろいろ請け負うた仕事やったり、家のこと。田んぼとか畑とか諸々のことやったりね。それが百姓の始まり。

--- 小田又で。

寺井: そうそう。

―― 先日息子さんには、高校生の時まで小田又に住んでたって聞きました。

寺井: そうそう、それから大学にはいったけぇね。

---それで町中に?

寺井: おられんようになったけぇねえ。 山にひびが入って、いつ崩れるか判らん から町中の土地を求めて家建てたん。山 に今でもひびが入っとる。家の後ろの山 は急なけぇなあ。いつ崩れるかわからん のじゃ。